

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	21世紀社会デザイン研究科	比較組織ネットワーク学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科教授	笠原 清志 印	
自然・人文の別	自然 ・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 名
研究課題	医学教育における教育支援組織		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 修士1年	井上 千鹿子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2003	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

研究分野：医学教育

21世紀の患者中心の医療の実現を目指す上で、新しい臨床医学教育の診察実習などに必要となる人的教育資源（模擬患者）の育成と、組織の運営について研究する。現在、医学教育の分野では、医療従事者のコミュニケーション能力向上を目標に、医学教育の中で S P * と呼ばれる患者さん役を使ったトレーニング、および試験が行われている。現在は慢性的に S P が不足し、その技術養成者が少ない。この S P の技術研究と人材の養成を推し進め、医学教育を支援する組織のありかたとその運営について考える。

※ S P = Simulated Patient、模擬患者（ある疾患の患者の持つあらゆる特徴を、可能な限り模倣するよう訓練を受け、疾患の模倣する演技技能を持つ健康人）

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 医学教育 } { 教育支援 } { 組織 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**医学教育における教育支援組織のありかた**

1.はじめに

本稿では、医学教育を支援する模擬患者による活動を紹介すると共に、医学教育を支援する活動におけるボランティア・マネジメントに関する SFR での研究の成果と今後の提案を探ることを目的としている。医学教育における模擬患者の活動において、教育をサポートする組織作り、人材養成していく方法について考えたい。

2.研究の概要

今日の医学教育をめぐる状況は、医学生の実績評価法などは従来のペーパー試験に加え、実技試験を加えるなど総合的な評価へと変わりつつある。とりわけコミュニケーション教育は重要視され、SP = 模擬患者を活用した教育が行われるようになってきている。模擬患者とは、医師や医学生の医療面接(問診)の練習相手として、実際の患者同様の症状や、会話を再現できるように「患者」を演じる役で、SP = Simulated Patients と略される。(以下、SP。)現在では医科大学が中心となった SP グループが多く作られるようになったが、SP 活動の定着化、維持のためにマネジメントの視点から、その組織活動の発展が求められていると思われる。

本研究では、模擬患者養成におけるマニュアル化についての研究、模擬患者活動における組織のあり方についての研究を行い、医学教育を支援していく組織についての研究活動を展開してきた。ここでは、「人材養成のマニュアル化についての研究」、「模擬患者活動における組織のあり方」の成果について述べたい。

I. 人材養成におけるマニュアル化についての研究

現在、模擬患者を活用した教育は主に問診の練習に活用されているが、診察にも役立つ SP が期待されている。しかしながら診察に役立つ SP は少なく、この問題は SP の養成に明確なマニュアルがないことが要因ではないかと考えた。そこで病気の症状を再現する SP (=模擬患者) の技術をマニュアル化し、人材の育成を行った。ビデオカメラでベテランの模擬患者(シニア SP)の行動を分析し、高度な模倣技能のマニュアル化に務めた。ビデオカメラにより SP の練習行動の分析は、人材育成のありかたについて研究につながり、マニュアル作りの基礎となった。以下に教材の開発と、SP が使用する皮膚の症状を模倣するためのマニュアル化について取り上げた「メイクアップを用いた Advanced OSCE の試み」第 36 回医学教育学会で発表予定、抄録を下記にまとめた。

OSCE の医療面接で活用される SP の多くは、健康な成人であり、リアリティーを持たせようとする、シナリオに取り上げることができる疾患・病態に限られてくる。OSCE の受験対象を、臨床実習終了時の医学部学生あるいは初期研修医とする際には、医療面接のマナーと同時に、臨床の現場で、医学知識を臨機応変に活用できるかどうかという点も評価可能な advanced OSCE シナリオの開発が望まれる。

SP に、患者の疾患・病態に関わる情報となるメイクアップを施し、面接のマナーと共に、情報収集、診察・診断、インフォームド・コンセント等の能力を総合的に評価するシナリオを開発する目的で以下のシナリオを考案した。

[症例 1] 全身性エリテマトーデスを想定したシナリオ

St. 1: 蝶型紅斑のメイクアップを施した女性 SP に対する医療面接

St. 2: 診断のために、外来初診時に施行すべき検査項目の選択

St. 3: 検査結果の説明と告知

[症例 2] 急性前骨髄球性白血病を想定したシナリオ

St. 1: 前腕および膝に紫斑のメイクアップを施した男性 SP に対する医療面接

St. 2: 胸部、腹部を含む診察

St. 3: 検査結果の説明と告知

考案したシナリオに併せて、症例 1: 顔面の蝶型紅斑、症例 2: 紫斑、をそれぞれ模倣したメイクアップの方法開発を行った。個人のメイクアップのテクニック、経験に左右されずに、複数の SP に同様に施すことができるように、使用する道具、色彩と使用色彩数、

研究成果の概要 つづき

塗布の形状・回数、などを選定、マニュアル化に努めた。メイクアップは、症例 1、症例 2 とも、判別が容易であり、疾患の診断に深く関わる所見である。また、対象者のレベルに合わせて、課題の難易度を調整することが可能である。

(第 36 回医学教育学会で発表予定、抄録「メイクアップを用いた Advanced OSCE の試み」より抜粋、加筆修正)

今後の課題として、病気の症状を再現する SP (=模擬患者) の特殊な演技技術のマニュアル化について取り上げていきたい。特に神経症候の再現ができる SP の養成について研究を課題としたい。

II. 模擬患者活動における組織のあり方

SP 活動におけるマネジメントに関する研究を、組織活動に重点を置いた研究を行った。日本における SP の活動に関する現状と問題を明らかにし、組織の発展の仕方と構成人数の変化によるマネジメントの仕方の変化について研究した。

なお、以下は 21 世紀社会デザイン研究科の紀要「21 世紀社会デザイン研究」に掲載した『組織運営面から見た日本の模擬患者活動の現状と課題』より、構成人数の変化による組織発展についての書かれた部分を抜き出し、下記にまとめた。

① SP 組織の発展

少人数の SP 養成からコアメンバーが集まってから後を 3 つの段階 (大、中、小) に分けて組織化するプロセスを考えた。人数の増加によって 10 人以下の「(小) グループ」から、10 人以上 20 人未満の「(中) 集団」、20 人以上「(大) 団体」といった順序に広がっていくと考えられる。10 人以上にもなれば活動も安定的に行えるようになり、NPO 法人にするなどのことも可能である。しかし現在のところ、全国で「団体」としての規模を持つ SP グループは 3 つ (東京、大阪、九州に各 1) で、10 人以下の少人数で活動している所がほとんどである。20 人以上の団体の運営について論じるには問題解決の意図に沿わないため、少人数のグループから中規模集団を組織するまでの時点について述べたい。

② 小グループを形成する段階

SP としての養成が終わり、小グループになった時点から、それまでインストラクターがやっていた連絡や練習日程の調整などはメンバー同士に任せ始める。インストラクターからコアメンバーの中の誰かにリーダーシップが委譲され、メンバーの中での取りまとめ役が必要となってくる。この時点ではまだインストラクターが企画の受け付けなどの庶務を行っている。

i 連絡網、ii 日程調整 は、携帯電話や Eメールの普及により連絡が取り易く、特に Eメールを使うことで日程調整は容易になった。

③ 中規模の集団を形成する段階

i 連絡網、ii 日程調整だけではなく、iii 企画受付 (企画受諾の指針、依頼書の作成)、iv 会計、v リスク管理 (ボランティア活動保険への加入など)、vi 人材養成、vii 人材の振り分け、viii ストレス・マネジメント などが必要となり、また庶務手続きを円滑にするためのマニュアルが必要になってくる。

i ~ v までは、他のボランティア活動でも必要になる一般的な庶務であり、メンバー内で事務処理の分担が可能なものである。vi ~ viii は、SP の活動において特徴の出る点であり、組織の拡大とともに意思決定やリーダーシップが必要となってくる。

(「21 世紀社会デザイン研究」『組織運営面から見た日本の模擬患者活動の現状と課題』より抜粋、加筆修正。)

3. おわりに

紙面の関係で研究内容を大幅に割愛せざるを得なかったが、今後何らかの形で随時発表していきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 井上千鹿子『組織運営面から見た日本の模擬患者活動の現状と課題』21世紀デザイン研究、2号、2004年2月26日発行、p.49～p.54
- ②
- ③ NPO法人21世紀社会デザインセンター主催、21sdcプロジェクト・フェスティバル 公開プレゼンテーション大会 (2003年6月14日)『SP(模擬患者)による医学教育の支援活動』立教大学8号館(8202)
- ④ 第35回医学教育学会大会(2003年7月26日)『インフォームドコンセントを重点に置いた医療面接』佐賀県医師会メディカルセンター